

遠き所を近く見て、近き所を遠く見よ

上 廣 榮 治

世をあげて不況が続くなか、不況とともに読まれたのが、宮本武蔵の『五輪書』だという話を聞きました。そういえば、かつて英訳されたこの書が欧米のビジネスマンの間で盛んに愛読されて話題になったのも、アメリカの貿易と財政の「双子の赤字」や「英国病」で欧米の経済が不調の時代でした。

武蔵といえば、「若年の頃から兵法に心をかけて国々を遍歴し、諸方の兵法者に出会って六十余たび勝負をしたが、一度もその利を失ったことがなかった」と自称する剣の達人です。その厳しい生き方が、今日の不況を生き抜く参考になるというので、ビジネスマンを中心に読まれているのだそうです。

なるほど、この書をひもといってみますと、随所に道を極めた人らしい鋭い章句に行き当たります。武蔵の「兵法」とは、極限の切所せしよにおいて生死と向き合い、これを切り抜けるための心得こころえです。ひとり実業人ばかりでなく、日々を実践の真剣勝負に生きる私たちにも、通じるものがあることに気づきます。

例えば、こんな言葉があります。「遠き所を近く見、近き所を遠く見ること兵法の専也せんなり」と。

焦眉しやうびの問題ではないからと、人が等閑視とうかんしするような問題。あるいは人類の幸福とか、自然との共生などという大きな問題、それらが「遠き所」です。武蔵はそうした遠き所をこそ、重視し優先すべきだというのです。

いま、私たちの眼前に、差し迫った問題があるとしています。どのように解決すればよいのか。皆様なら、すぐにおわかりのことと思います。倫理という遠大な理想えんだい（遠き所）に則し、倫理の大道たんだうに外れぬように、眼前のこと（近き所）を裁くさばのです。

例えば、子どもの非行の問題をどうするか。これは差し迫った問題です。この問題を、親が生活を改めること、倫理を実践することによって解決する。これが「遠き所を近く見る」解決法です。

また、嫁しゅうとめと姑しゅうとあが食事をめぐって対立したとします。これを食事の内容そのもので解決しようとしても無駄なことです。両者の主張は平行線をたどり、厄介やっかいな感情的なしこりを残すだけでしよう。かかる採め事は、家庭愛和を実現しようとする努力によってのみ解決できるのであります。家庭愛和を実現するために、食事はどうあったらよいか。そこから発想するのです。あくまで、「遠き所」を優先させて、「近き所」の解決はかを図るのが、実践倫理流の方法です。

倫理社会の実現、万人の幸福の実現という「遠き所」を、常に「近く見る」。倫理という「遠き所」をもって、眼前の「近き所」の問題を解決すること。これこそ、私たちの日々の実践の要諦ようていなのです。

なぜなら、倫理社会の創建という遠大な大目標も、その実現は一人一人の日々瞬間瞬間の行動の積み重ねの上に成るからです。

しかし、この「遠き所を近く見る」ことは、日々、倫理の道に精進しておられる皆様には、さして難

しいことではないと思います。なぜなら、皆様はすべてに倫理を優先させ、倫理という基準で事を裁くことに習熟しておられるからです。

では、後段の「近き所を遠く見る」とは、いかなることでしよう。これは「遠き所を近く見る」と同じことを逆にいったままでだという解釈も成り立つでしょう。しかし私は、眼前の小事しょうじに捉とらわれて事を誤るな、と教えているのだと解釈したいと思います。

人は常に目先の利害に目が眩くらみます。いままさに重くのしかかってくる悩みや懊惱おうのうに捉とらわれて、何も見えなくなってしまう。怒り、悲しみ、不安、恐れなどが、人から理性を奪うのです。

武蔵の言葉は、一撃に命をかけて対峙たいじする兵法者の心得です。興奮も不安も恐怖も負けを誘さそい、死につながります。かかる切所においても平靜でいられるかどうか、それが生死の分かれ目でした。

こう考えると、「近き所を遠く見る」ことのほうは、「遠き所を近く見る」ことと比べると、まことに難事なんじと思われれます。なぜなら、常に当事者は激しい感情に揺さぶられるのが普通だからです。実践精進しやうじんを積まれた会友といえども、生き死にの切所において、冷静であることは難しいと思われれます。

例えば、今月中にまとまったお金が作れないと会社が倒産してしまう。融資は断られ借りられるところもはやない。自分の家も担保に入っている……。かかる状況にあつては、誰でも目先の金策で頭が一杯になってしまつて、この切所を切り抜ける妙手みょうしゅなど、まるで考えられなくなつてしまいます。会社の倒産がそのまま自分の身の破滅だとまで思い詰め、金策以外に生き残りの手立てもあろうし、会社を潰つぶして仕事を続ける方法もあるなどは考えません。ただただ当面のお金をどうするかのみのみに頭がいつて、藁わらにもすがらる思いで最も拙劣ちせつな手を打つてしまいます。最悪の破滅への道に、自らみずかを追い込んでしまうのです。

では、どうしたらよいか。そんなときにこそ、「近き所を遠く見る」のです。当面のお金については取りあえず置いておき、現時点で会社を整理してしまうことを決心するのです。そして、取引先や社員たちに及ぼす被害を最も少なくするには、どうしたらよいか。倫理的な「終わり方」とはどうあるべきか。そこに思いを凝らすのです。実は、窮状を乗り越えて事業を蘇生させる妙手とは、腹をくくって終わり方を考えるなかでこそ、発見できるものなのです。身を捨ててこそ、浮かぶ瀬もあるのです。

兵法者の立ち会いで遅れをとらない秘訣は「死ぬ」ことであると申します。なるほど、自分がすでに死んだ者だと覚悟できれば、目先の恐怖や不安や興奮は雲散霧消するに違いありません。

武士道の要諦を説く『葉隠』は、「毎日、朝と夕に、改めて死んだと覚悟せよ。いつも死んだ身体なのだと意識していれば、武道も自由自在になり、仕事も一生失敗することはない」という意味のことをいっています。眼前の煩いを自分の死後という「遠き所」において、自由に発想せよ、ということです。

こんな川柳もあります。「裸にて生まれて来たに何不足」。人間本来無一物。地位もお金も、見栄も意地も、みな後から積み重なった塵芥でしかありません。ただただ、生まれながらの倫理観に従って生きるのみだと思い定めれば、今日のお金などなんのことがありません。会社を整理せざるを得なければ、いかに倫理的に整理ができるかを考えればよい。そう腹を据えて、発想を転換してみることで、誰彼に相談してみることで、起死回生の妙手とは、こうした死地において生ずるものだと、古人は教えているのです。

武蔵の言を借りるならば、「遠き倫理の理想を近く見、近き所を倫理で見る」と実践倫理の専也」です。私たちが毎朝誓う五か条が、すべてこの精神に則っているのだと、賢明なる皆様はすでに気づかれたことと思います。